

高等学校普通科を変えよ

東京都立晴海総合高等学校 相談部教諭・キャリアカウンセラー

千葉吉裕

坂本龍馬、直江兼統、篤姫、山本勘助、山内一豊・千代、源義経、近藤勇、宮本武蔵。なんだかおわかりでしょうか。そう、NHKの大河ドラマの主人公です。大河ドラマで、なぜ、その人物にターゲットを当てたのかという制作意図を調べると、現代社会の課題やニーズを感じ取ることが出来ます。激動の時代に、理想に燃え、戦略的に世の中を動かす志、家族愛や義を大切にして活躍する主人公の生き様は、現代社会に生きる我々へのメッセージです。8年間の主人公を取り上げましたが、源義経、近藤勇、宮本武蔵は、制度が変わろうとする中で、変化に翻弄された人物です。それ以降は、「戦略」「新しい国づくり」などがカギになっているように思われます。大きく変わろうとする現代社会の中で、源義経、近藤勇、宮本武蔵という人物のように時代に翻弄されるのか、坂本龍馬、篤姫というように新しい時代を作っていくのか、公共放送という立場で、現代人の生き方を指し示しているのではないのでしょうか。

今、教育現場は大きな変化の中にあります。コンピュータ技術の進歩によって、求められるスキルも、「知」の在り方も、大きく変わろうとしているのです。その変化への対応は、宮本武蔵が生きた戦国の世から徳川の世への時代にヒントが隠されています。関ヶ原の戦い以前と以後では人材登用の一つのスキルだった武術の評価が大きく変わりました。武術は戦国の世の終焉とともに、登用される能力ではなくなってしまったのです。それは、かつて事務職の採用に珠算や、字がきれいであることが有効であったものが、電卓やワープロ、そして、コンピュータ、さらにインターネットの導入により、それほど評価されなくなっていくのにも似ています。そして今、知識基盤社会の顕在化により、「学校だけで学んだ知を習得している」というだけでは評価されない時代になろうとする中で、教育は転換を迫られています。

この大きな社会変化に教育がどのように対応すべきなのかという指針が発表されました。平成20年7月1日に閣議決定された「教育振興基本計画」です。その中で、教育基本法に示された教育の理念の実現に向けて、今後10年間を通じて目指すべき教育の姿を明らかにするとともに、今後5年間（平成20～24年度）に取り組むべき施策を総合的・計画的に推進することが示されています。そこには、普通科高校におけるキャリア教育の充実が強調されています。また、平成21年7月30日に文部科学省から発表された「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（審議会報告）」の中では、「特に普通科における教育について、社会・職業とのかわりがありにも薄く、社会・職業への円滑な移行の観点から問題である」と指摘されています。高

等学校の7割以上を占める普通科高校が、時代の現状から、あまりに問題があり、強く改善が要望されているわけです。その証拠が「OECD生徒の学習到達度調査（PIISA）」の結果です。日本の高校生の教科学習が「自分の将来に役立つぞうだ」「将来の仕事の可能性を広げぞうだ」などの意識価値が他国に比べて極めて低いのです。普通科の高校の学びが、大学入学試験など卒業後の進路決定の手段と関連性が強い。ため、大学入試の易化に伴い、なぜそれを学ばなければならないのか理解することがますますわかりづらくなってしまうのです。

学校での知が、宮本武蔵の時代の武術にならないように、急ぎ変化への対応が求められています。幕末、欧米列強諸国が植民地化の圧力をかけてきた時や、敗戦時と同じように、今、コンピュータ技術の発達によって、時代は大きく変わろうとしており、教育は急ぎ転換しなければなりません。しかし、これまでのシステムで成功してきた人は多く、成功体験を超えて、社会全体を俯瞰しながら転換をしていくことは決してやさしいことではありません。この変化にどう立ち向かうか、この差し迫った命題に対し、悠長に構えてはいけないうと、大河ドラマの主人公たちが生きた時代から学ぶことができるとは、ないではないでしょうか。